

遠隔間合同ゼミナールにおける CSCLを利用したインタラクションに関する考察

望 月 俊 男

(慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科)

柴 原 宜 幸

(日本橋学館大学人文経営学部)

Interaction between Distant-Seminars using CSCL

Toshio MOCHIZUKI

(Graduate School of Media and Governance, Keio University)

Yoshiyuki SHIBAHARA

(Faculty of Human Cultural Sciences and Business Administrations, Nihonbashi Gakkan University)

1. はじめに

2000年度の前期(春学期)に、京都大学の全学共通科目「教育とコミュニケーション」(田中教授担当。以下、京大ゼミと略す)と慶應義塾大学湘南藤沢キャンパスの井下研究会(以下、井下ゼミと略す)との間で、合同ゼミナール(KKJ: Kyoto-Keio Joint Seminar)の2年目の授業実践が実施された。KKJ実践の枠組みは(1)授業、(2)インターネット、(3)合同合宿という「3つのリアリティ」が有機的に組み合わさった実践として位置づけられている(図1)(田口・村上、1999)。この合同ゼミナールは、通常の各ゼミでの授業に加えて、時間的・空間的距離を埋めるための専用の「掲示板⁽¹⁾」が提供され、そこで相互の交流を図ることができるように設計されていた(尾澤、2000a)。さらに、学期の終盤には、2泊3日の合同合宿が実施された。これらを通じて、学生は、通常のゼミナールにおける集団内インタラクションだけでなく、集団外とのインタラクション、それも異文化集団とのインタラクションを経験することになる。

このような授業が設計された目的は、田中(2000)や井下(2000a)に詳しく述べられているが、ここでは、簡単にその確認をしておくことにする。KKJ実践の目的は、田中(2000)によると、「多様なコミュニケーションの機会を与え(p.7)」ることによって、「自他とのコミュニケーションを通じての自己表出・自己相対化・自己統合(p.7)」を促進することにある。井下(2000a)もまた、「異文化接触による自己理解及び「視野の拡大」がいかにして達成

できるか(p.13)」にあるとしている。即ち、自大学の学生とのコミュニケーションばかりでなく、他大学の学生、それも関東と関西、国立大学と私立大学という異文化集団との相互作用を、「掲示板」や合同合宿といった多様な機会を通して行っていく中で、学生自らが「自己探索」しつつ「自己成長」していくことが目的であった。

KKJという実践に付与される評価は、上述した目的に照らし合わせてなされなければならない。即ち、これら一連の活動を通して、自己成長が促されたかどうかである。もちろん、このような試みにおいては、副次的な効果が得られることは珍しくはない。

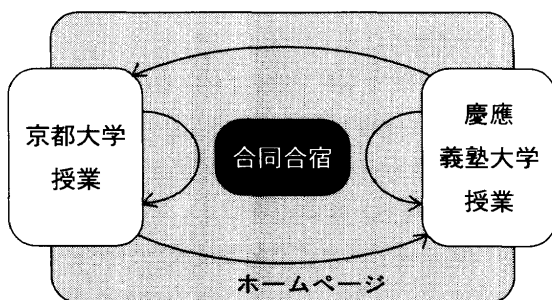


図1 3つのリアリティ

(田口・村上(1999)を一部変更)

今回のKKJにおいても、学生たち自身が、役割分担を決め、合宿中のスケジュールを立て、合宿中に設定したセッションを運営し、それぞれを円滑にこなしていったことについては、正当に評価されるべきである。しかし、本来の「自己探索・自己成長」といった目的を考えた場合、合宿の善し悪しよりもそこに至るプロセスに対して検討を加えるべきである。そのために、合宿とは一線を画したところでの、集団間のインタラクションを手がかりに、KKJ実践の課題にアプローチしていくことにしたい。

2. 本論文の背景と目的

KKJ実践の合同ゼミナールとしての最大の特色としては、異文化間インタラクションが強調されたこと、及び「掲示板」を利用して、オンラインでのインタラクションを通じたゼミナールが企画されたことにあると考えられる。ここではこれら2つの特色を踏まえて、本論文における問題意識を述べることにする。

2.1 異文化間インタラクションを組み込んだゼミナールの教育効果

そもそも異文化間インタラクションを強調することによってどのような教育効果が得られるのだろうか。ブリスリンら (Brislin, et al., 1983) は、異文化間行動においてもっとも重要な技能は他者になることであると議論したが、逆にいえば、異文化間インタラクションを通じて、他者の視点を理解しうる技能を体験的に習得していくことが可能になると考えられる。このプロセスを通じて、他者の視点への「気づき」がもたらされ、自己の視点に固執せず、メタ的な視点から自己イメージを改めて見つめることによって、その変革がもたらされることが期待できる。

このようなプロセスを通じて、自己を統合的に再編成、組織化することにより、自ら持っている人格特性を変革し、開かれた態度を獲得することが、このプログラムで暗に意図されているねらいともいえる。

また、井下 (1997) は異文化理解教育プログラムの実践方法を8つに分類しているが、この分類に従えば、KKJ実践は集団と集団との異文化接触を行う「集団的学習法」にあてはまる。この方法は「両者の文化的特長が明瞭なまま、異質なものの出会いが生じやすい (p.216)」とされ、比較的短期間で異文化間行動を活性化させる条件として有効であると考えられる。その意味においても、KKJ実践における異文化間インタラクションは、3ヶ月という短期間のプログラムの中で自己探索を導くために重要な要素であったといえるだろう。

2.2 CSCLを利用することによる教育効果

KKJ実践で異文化集団の接触の場として利用された「掲示板」は、WWW (World Wide Web) 上に構築されたBBS (Bulletin Board System) である。BBSは古くからネットワーク上で意見交換や情報交換をするために利用されていたが、WWW上ではその発言間の関係などをGUI (Graphical User Interface) を利用して可視化することができる。それにより意見・議論の整理が可能になり、簡易グループウェアとして機能することもできる。

さらに議論を支援するためのいくつかの機能を追加したBBSを利用して、学習者がオンラインでインタラクションを行い、学びを深めていく研究が、昨今CSCL (Computer Supported Collaborative Learning) と呼ばれている研究領域でさかんに進められている (稲葉・豊田、1999)。現在では、単に発言間の関係を可視化するだけでなく、例えば、ユーザがWWWのハイパーリンク (hyperlink) を利用して他者の発言の引用や参照を行うことを可能にするシステムが開発されている (例えば、益川、1999など)。学習者は、こうしたシステムを利用して、ネットワーク上で展開する状況に積極的にアプローチをしながら、学びを深めていくことが可能になっている。

尾澤 (2000a) は、三宅 (1997) がいう「学び」を支援するコンセプトを引用して、KKJ実践におけるCSCLの役割の位置づけを行っている。三宅は、3つのキーワードとして、①authenticity (真実性)、②scaffolding (足場かけ)、③reflection (再吟味) を挙げているが、尾澤はこれを援用し、①真の自分の探索を行う上で、②「掲示板」上でのインタラクションの中で経験知の問い直しを行い、③その過程を通じて、自らの視点や経験を吟味し、自分自身に対して批判的に思考することを支援する学習環境として、KKJ実践における「掲示板」の機能役割を位置づけている。今回KKJ実践で利用された「掲示板」は尾澤ら (2000) が開発したものであるが、このシステムも発言関係を可視化するばかりでなく、自らの発言しようとする内容を再吟味する機能 (プレビュー) を実装したCSCLの一種である。

このようなCSCLの機能によって、自己表出を再吟味する視点を養うことが可能になることから、異文化間イン

タラクションを通した学びを効果的に導くうえで、CSCLが重要な役割を果たす可能性があったといえる。

2.3 本論文における問題意識

ここまで、異文化間インタラクションにCSCLを応用することによって、自己を相対化しながらの自己探索を効果的に促す可能性を示した。こうした前提のもと、KKJ実践ではCSCLは十分な機能を果たしたのだろうか。

尾澤（2000b）が述べるように、2000年度に実施されたKKJ実践においては、「掲示板」上での発言・閲覧そのものは、京大ゼミの学生集団（以下、京都側集団）が圧倒的に多く、京都側集団と同人数程度で構成されていた井下ゼミの学生集団（以下、慶應側集団）とは7：3の比率であった（発言・閲覧合計）。また、内集団でのインタラクションは、いずれも同程度に生じたものの、外集団の発言の閲覧や、その発言に対する意見交換を行う行為に関しては、慶應側集団は内集団発言の閲覧と比較して少なかったとされる。

本来であれば、3つのリアリティの「授業」と「合宿」を有機的に接続するための「インターネット」であったはずなのに、少なくとも慶應側集団にとっては、第3のリアリティとして準備されたオンラインでのゼミナールは有効に機能しなかった可能性が示唆される。

これは、単に「掲示板」の機能やインターフェイスといった問題で一蹴することはできるだろうか。むしろ、コンピュータを介したコミュニケーション（CMC:Computer Mediated Communication）特有の問題や、利用する集団の特性やその集団間の関係に起因するものなど、より複雑な原因を解明する必要があるだろう。

また、CSCLの研究は現在さかんに進められており、近い将来、KKJ実践以外にも、CSCLを利用した様々な遠隔間合同ゼミナールが行われる可能性がある。その際、授業担当者が配慮すべき問題として、CSCL上の集団間インタラクションや異文化間インタラクションに対する学習者側の様々な障壁を検討していく必要がある。

そこで、本論文では、KKJ実践を包括的にとらえつつ、とくに慶應側集団に焦点をあて、CSCL上の集団間インタラクションの機会に参加することを阻害した原因について考察する。

3. 研究方法

3.1 研究協力者

2000年度春学期に井下ゼミを履修、あるいは聴講していた学生18名のうち、一貫してKKJ実践に関わる活動に携わった者17名^(註)に対して、合宿終了後のゼミの時間に、インタビューによる研究協力を依頼した。本インタビューによって知り得たことは、内容を要約した上で、匿名でもって授業担当者にフィードバックされること、およびインタビューの内容の一部は、匿名でもって研究発表の対象となることを明言し、17名全員から研究協力の承諾を得た。これらの学生の学年および性別を、表1に示す。

表1 研究協力者の属性別人数

性別	学年			
	1年	2年	3年	4年
男	1	3	3	1
女	0	3	3	3

3.2 授業参与観察

慶應側集団のKKJ実践への取り組みのプロセスを記録するため、授業参与観察を行った。井下ゼミの授業ならびに授業外の学生活動（サブゼミ）を把握することにより、教室で生じた出来事が、CSCL上のインタラクションにどのような影響を与えたかを明らかにすることを目的とした。

授業観察は参与観察法によって行ったが、全ての授業の観察を行うことはできなかった。全部で8回観察を実施し、うち6回を望月があたり、3回は柴原が担当した（うち2回は共同）。なお、観察時には2回を除いて、ビデオテープやカセットレコーダーによる録画・録音は行わず、観察ノートを記録するにとどまった。これは学生の活動への影響を考慮してのものである。また、授業中に学生活動に介入することは極力回避した。

なお、観察記録の一部は、インタビュー時に口頭で提示することにより、学生らの任意の語りを導出するために利

用した。

3.3 インタビュー

インタビューは、KKJ合宿（6月30日～7月2日）が終了して約3週間が経過した、7月21日から7月31日に、慶應義塾大学湘南藤沢キャンパスⅡ研究棟308号室にて実施された（1名のみⅡ研究棟402号室で実施）。筆者ら2名がインタビュアーと記録係として参加した。インタビューでの質疑応答の内容は、協力者の許可を得て、すべて録音された。所要時間はおおよそ60分を目途にしたが、70～90分を要した者も数名いた。

インタビューは、半構造的インタビューであり、質問の骨子として、以下のものが準備されていた。

- 1) KKJ合宿についての総合的感想
- 2) 「掲示板」利用について
- 3) コンピュータ環境、コンピュータ経験について
- 4) 「掲示板」、合宿およびサブゼミとの連携について
- 5) 京都側集団との現在（インタビュー時）の交流について
- 6) 来期のKKJにおいて考え得る改善について

可能な限り話の流れを妨げずに協力者の語りを導出するため、協力者からの回答を受けながら質問を構成し直しつつ進めた。そのため、必ずしも上記の順序で展開したわけではない。しかし、上記6点については情報を得ることができた。

本論文での分析の対象となるのは、主に1) 2) 4) 6) である。全員へのインタビュー終了後、著者らがインタビューの全容をテープから転記し、関連する回答を抽出後、授業観察記録、及び後述するその他の資料を参照しながら、解釈を行った。

3.4 その他の資料

KKJ実践は、授業という側面だけではなく、研究的な視点にも大きなウェイトが置かれたプロジェクト（井下、2000a）であった。もちろんこのことは、授業の選択や開始にあたって、学生にも明言されていた。よって、KKJ実践における活動全般を通して、上記以外にも、さまざまな形で資料が得られているが、ここでは、分析にあたって参考にしたもののみを列挙しておく。

- 1) 合宿終了後に学生に課された「KKJ合宿感想文」
- 2) 「掲示板」利用に関する量的データ（尾澤、2000b）
- 3) 「掲示板」に投稿された発言の内容

4. 結果と考察

KKJ実践のプロセスにおけるCSCLを利用した集団間インタラクションを考察するにあたって、まず授業の参与観察分析を概観し、KKJ実践における井下ゼミの特色を明らかにする。その後、慶應側集団にとっての、CSCL上の京都側集団とのインタラクションへの阻害要因について、授業観察の記録とインタビューのログを総合的に考察する。考察にあたっては本研究の観点から、集団に生じた問題、オンラインであることの問題、それらの複合要因の3点に関して述べることにする。

4.1 井下ゼミのカリキュラムとサブゼミでの取り組み

井下ゼミは、4月11日から7月11日の火曜日午後4時40分から90分のプログラムで行われた。ゼミの授業は全部で13回行われたが、5月に入ってからほとんどのゼミで90分を超過し、140分～180分行われることが常であった。また、そのあとに「サブゼミ」の活動が引き続き行われた。

筆者らによる授業参与観察は、5月2日から7月11日までのうち、合計8回行われた。表2は井下ゼミの授業内容と「サブゼミ」の活動概要を、主に観察記録と「掲示板」上に投稿された授業概要^(III)から整理したものである。

井下ゼミは基本的に学生による発表と討論によって構成されており、授業担当者による講義は原則として行われな

い。「ライフデザイン」「鏡映的自己像」「研究関心」のそれぞれのテーマについて、学生がレジュメを書き、全員の前で発表し、それに関する質疑応答と議論を行う。何かしらの専門性を身に付けるような講義・輪読を行うゼミナールではなく、「話すこと、聞くこと」に重点が置かれていた。また、学生個人の研究については、「コミュニケーション」や「教育」の領域にある程度あてはまれば、学生自身が興味を持つテーマについて研究を行うことが許されている。ただし、その研究は個人の時間に大部分を依存している。

2000年度はこれに加え、6月初旬に京都大学高等教育教授システム開発センターから、KKJ実践スタッフの一員である大山泰宏助教授、神藤貴昭助手を招聘し、「ボディワーク」の実習を行った。授業担当者は、「ゼミ開始以来、初めて」（井下、2000b）身体を使ったゼミを行って、それ以来「ゼミの中での雰囲気が変わったように思う」と振り返っている。

井下ゼミ及び「サブゼミ」の特徴としては、観察記録の分析から3点挙げることができる。

第1に、ゼミのカリキュラムとして、自らの生き方や人生設計を語らせる「ライフデザイン」や、クーリー（Cooley, 1902）のlooking-glass selfを応用した「鏡映的自己像」など、自己開示や自己受容を主眼とした授業が行なわれていることである。これはKKJ実践の目標と合致する部分があり、その意味では、KKJ実践も井下ゼミのプログラムの1つ、あるいはその延長として捉え得ると考えてよいだろう。

第2には、井下ゼミの授業の中でKKJ実践のために時間が割かれることはなく、そのため学生がKKJ実践に取り組む時間を確保するために「サブゼミ」を自主的に開いたことである。また、授業担当者はKKJ合宿について、宿泊先・合宿費用の振込み・集合時間といった事務的な連絡以外の介入は一切行わなかった。逆に言えば、合宿中のプログラムの全てを学生に一任していたといえる。また、学生だけのメイリング・リストを作ってそこで議論しようとする動きもみられ、実際に「サブゼミ」用のメイリング・リストが作られた。

表2 井下ゼミのプログラムとサブゼミでの取り組み

日時	ゼミ	サブゼミ	観察者
4月11日	オリエンテーション 自己紹介	(なし)	(不在)
4月18日	個人関心の簡単な紹介	(なし)	(不在)
4月25日	休講	「ライフデザイン」のレジュメ集の製本	(不在)
5月2日	「ライフデザイン」(1)	KKJ合宿の目標設定 ⇒「一期一会をプロデュースする」	望月
5月9日	「ライフデザイン」(2)	目標・目的ってそもそも何?	望月
5月16日	「ライフデザイン」(3)	テーマ案の発表(発散的)	望月
5月23日	「ライフデザイン」(4) 「鏡映的自己像」(1)	サブゼミのやり方はどうあるべきか?	(不在)
5月30日	「鏡映的自己像」(2)	合宿系の決定	望月
6月6日	ボディワーク実習	(なし)	望月・柴原
6月13日	ボディワークの振り返り	時間割・セッション枠の確定 部屋割りの方法の希望	望月
6月20日	研究関心の発表(1)	部屋割りの確定 セッション案確定 (京大ゼミ学生に電話)	柴原
6月27日	研究関心の発表(2)	集合時間と時間割調整 セッション担当の確認	(不在)
KKJ合宿(修善寺) 6月30日～7月2日			
7月4日	休講	自主サブゼミ(詳細不明)	(不在)
7月11日	KKJ合宿の振り返り	打ち上げ	望月・柴原

第3には、「サブゼミ」で行われた議論は、①合宿の目標設定、②役割分担、③時間割の決定、④合宿で行う企画の決定、の4段階で進められたが、特筆すべきは、その内容が合宿の企画についての議論に終始している点である。この中で、「掲示板」上での京都大学側の発言を学生が引用することもあったが、それは合宿の話題に限られ、「掲示板」上で展開する合宿以外の様々な議論について話されることは皆無であった。これは、京都大学から大山助教授が井下ゼミに來訪し、ボディワークの実習を行った後においても同様であった。

以上を鑑みると、井下ゼミのプログラムの一環としてKKJ実践を位置づけることができるにもかかわらず、実際のプログラムでは、井下ゼミと「サブゼミ」が全く違った観点で行われていたことに注目できる。

4.2 オンライン集団間インタラクションの阻害要因—授業観察とインタビューをもとに—

次に、授業観察の記録と「掲示板」の発言記録をもとにして行ったインタビューの記録をもとに、慶應側集団から京都側集団に対するオンライン・インタラクションの阻害要因について検討した。この要因は、大別すると3点挙げられる。第1に慶應側集団の構造的な問題、第2に京都側集団とのコミュニティ形成における問題、第3にCMC特有の心理的障壁である。慶應側集団の構造的な問題を分析すると、集団アイデンティティの醸成→内集団への偏向性→外集団への無関心といった形で、2つの変化段階を経て生成されたものであると考えられる。

(1) 内集団へのアイデンティティを高めた要因—慶應側集団の達成動機づけ—

慶應側集団にまず特徴的なのは、自分の意見を「掲示板」に出してもいいのか、相手に個人の意見としてではなく内集団全体の意見として見られるのではないかと考えてオンラインでの発言を躊躇した、と言及する学生が多いことである。

「書くときに自分の意見なのかそれともinoken^(iv)全体としての意見なのかとか、そういうのが良く分からなかった。書いていいのか、自分を書いていいのかもわからないし、他の人のを読んで、京都側の読んで、その人本人だけの意見なのか、全体としての意見なのかがいまいちよくわかんなかった(2年・女・インタビュー)」

「私が書くべきでも、他の人とかが書くべきでもなく、だからそういうのとかがあやふや、すごい。誰に問いかけているのかとか、誰が代表してリプライすればいいのかとか何もなかったから(2年・女・インタビュー)」

こうした現象は脱個人化と呼ばれ、個人のアイデンティティが低減することをいう。既にキースラーら(Kiesler et al., 1984)がCMCにおける脱個人化を論じているが、慶應側集団にも全く同様の影響がみられ、さらに特徴的なことに、相手集団さえ脱個人化させていることも指摘できる。

KKJ実践の場合のような集団事態における脱個人化の条件として、スピアーズら(Spears, et al., 1990)は、集団のアイデンティティが高まっていることを必要条件として挙げている。それでは、このような集団アイデンティティは果たして慶應側集団で形成されていたのだろうか。そのいくつかは、KKJ実践に対する活動から示唆される。既に授業観察記録から、「サブゼミ」における慶應側集団のKKJ実践に対する活動は合宿の企画に関する議論に集中していたことがわかっている。さらに「サブゼミ」の初期段階で目標設定を行い、そこで合宿の目標を、慶應側集団から「一期一会をプロデュースする」という意思決定をしている。また、ほとんどの学生は合宿の企画運営における何らかの役割を分担していた。

レヴィン(Lewin, 1948)は集団活動において、各メンバーの達成が仲間の達成と密接に関連しているような集団課題がメンバー間の相互依存性を高めると論じたが、こうした目標設定と役割分担が、合宿を「プロデュースする」ことに対する達成動機づけを強め、慶應側集団の成員性を高めたと考えられる。

実際、インタビューにおいて合宿についての感想を求めたところ、「それ[自分の役割]がその2泊3日以前から活動することができて、何かものすごくモチベーションが高いまま、行けたのが良かった(1年・男・インタビュー、[]内著者補足・以下同様)」や「実際にそれ[打ち合わせていた内容]が合宿で実現して、すごい充実してたっていうか、何かやり遂げたっていう感じがあって(3年・女・インタビュー)」といったような、合宿の企画という目標を達成したことに対する充実感を第1に挙げる者が多かった。これは、KKJ実践での慶應側集団としての目標が合宿の企画

の成功そのものに置かれていたことと、その達成動機が充足されたことを明確に物語っている。

時系列的に整理すれば、慶應側集団の「合宿を成功させる」という目標設定の強さによって内集団の結束が強まり、個々人の集団への成員性を高め、その結果オンラインにおけるインタラクションでの代表意識が強まったために、「掲示板」での発言が抑制されたといえよう。

（２）内集団への偏向性による無関心

慶應側集団の第２の特徴として、単に、「掲示板」での発言を通しての外集団への意見提示や、外集団からの投稿に対する返信が少ないだけでなく、外集団からの記事の閲覧自体の数が低迷していたことが挙げられる。いわば外集団への無関心行動である。

外集団への無関心を示す行動は、ゼミや「サブゼミ」でも見られた。５月３０日のゼミでは授業の終了間際に、合宿の集合時間を決める議論がなされた。本来ならば、京都側集団も慶應側集団も全員が集まって、はじめてKKJ合宿の「集合時間」と言えるであろう。だが、この席上、慶應側集団はほぼ全員が「自分の都合の良い時間に集合すればよい」という結論に合意した^(v)。偶然このときに授業担当者が在席していたので、介入が行われ、結局は、京都側集団が集まる時間までに慶應側集団は全員が到着する、ということになった。一種の集団極化が生じたと考えられるとはいえ、内集団メンバーの都合に合わせれば良しとする判断がなされ、外集団である京都側集団が全く配慮されなかったことは、注目に値した。こうした京都側集団に対する無関心について、インタビューでも言及した学生がいる。

「あんまはっきりいって京大の人たちのことはそんなに頭になく…頭にあったんですけど、でもほんとなんて言うの、現実的なものじゃなくて、イメージもなかったし、見てなかったから掲示板。だから京大というよりも、私たちがどうやったら楽しめるかなんて言うことを考えちゃっていたかもしれません。（４年・女・インタビュー）」

この学生は「別に知らない人たちだからと思って」「掲示板」にも興味を示さなかったと述べている。彼女にとっては、このプログラムにおいて京都側集団の存在自体はそれほど重要ではなく、彼女らの合宿が「楽しめる」ものになることが主要な目標となっている。

この学生の語りが慶應側集団の全員の意思を代表しているわけではない。だが、彼らが「サブゼミ」の時点で京都側集団の存在を少なからず気にとめようとしなかったことによって、オンラインにおいても、京都側集団に対して無関心になったと考えられる。

こうした無関心行動を引き起こした原因をさらに追究すると、ある「サブゼミ」での出来事を問題として取りあげることができる。５月９日のことであったが、この日の「サブゼミ」では、学生だけのメイリング・リストを新しく作って、そこで合宿の企画についての議論をしようという提案があった。それに対して、「尾澤さんがせっかく作ってくれた掲示板があるんだし、もっと掲示板を使って議論をして、ゼミとゼミ〔今週のゼミと次週のゼミ〕をつないでいったほうが、京大の人たちにもわかりやすいと思うし、いいと思うんですけど（２年・男・５月９日サブゼミ）」と提案する学生がいた。これに対して、「そんなことをしたら、京大の人から突っ込まれてしまうじゃん。作りかけのものが壊されてしまうかもしれない。結局まとまりがつかなくなるよ（４年・男・５月９日サブゼミ）」と強く反論が行われた。この反論に対して再度反論するものは出ず、学生のためのメイリング・リストで議論を進めることが決まった。

この出来事をどう解釈したらよいだろうか。京大からのいわば「攻撃」を警戒する心理状態はどこに由来するのだろうか。それを明らかにする指針として、京都側集団に対する知的側面でのコンプレックスが存在したことを示す発言がある。こうした発言は、「サブゼミ」の中での発言や、インタビューの中でも頻繁に出現する。

「京都大学は賢いと思うんで、やべー〔やばい〕俺らうかうかしてらんねーよみたいなことを感じて良いし、逆に感じて欲しいんで（２年・男・５月１６日サブゼミ、合宿の企画の議論で）」

「向こうの人がとってもすごく論理的に意見をばーって言ってきて私たちが押されてしまうことがあるんじゃないかというふうな不安があったんですけど（３年・女・インタビュー）」

「すごいお堅い話が多くって、特に最初のあたりは。自分は別に、すごい強い意見があったら書きたかったけど別に

あんまり意見ないし（2年・女・インタビュー）」

このように、外集団である京都側集団と内集団を比較したときに、外集団を「論理的」「賢い」「お堅い」という言葉で表現し、外集団を優位なものとして認めていることが示されている。こうした評価を決定づけた要因として考えられるのは、おそらく京都側集団が「掲示板」上で授業の延長としての議論を続けていたことに由来するものであろう。京都側集団は「掲示板」開設当初から、授業の延長として「掲示板」上で「出席をとる授業」や「"まじめ"について思ったこと」についての議論を展開した。慶應側集団にとっては、「掲示板」の利用初期段階で、このような京都側集団とのオンラインの「出会い」によって、アッシュ（Asch, 1946）のいう印象形成過程における初頭効果（primacy effect）が働き、外集団に対するコンプレックスが生じたものであると考えられる。

このような外集団を相対的に優位と位置づける集団評価によって、内集団のアイデンティティを守ろうとする自己防衛機能が働き、内集団の結束と凝集性の増大という効果が現れた（Sumner, 1906）と考えられる。自己防衛の結果として、外集団に対する無関心行動をとることによって、外集団との接触機会を狭め、相対的に内集団の結束を高めようとしたのではないかと考えることができる。

（3）関心の共有とコミュニティ形成

ここまでは、主に慶應側集団に生じた問題について言及してきた。しかし、そもそもKKJ実践は、慶應側集団と京都側集団との協調作業があってこそ、その目的に接近できる種類のものである。その点からすると、慶應側のKKJ実践3ヶ月間の経過からいって、インタラクションが活性化するのに不利な状況にあったと考えられる。

最初に「掲示板」に投稿したのは、京都側であり、初期段階ではその投稿を受けた形で、京都側だけで議論を展開したことは、既に述べた。しかしここでの議論は、慶應側集団にとって難解に感じられるとともに、必ずしも了解可能なものではなかったのかも知れない。というのも、京大ゼミと井下ゼミは、確かに「教育とコミュニケーション」という主題は共通に打ち出しているものの、それぞれ独自のカリキュラムに則って進行している。だが「掲示板」利用のスタート時において、関心の共有が図られなかったことによって、それぞれの内集団へと回帰していった可能性がある。「慶應からの返信を積極的に求められていなければ、向こうのテリトリーって感じ（4年・女・インタビュー）」なのである。

ただ、この初期段階で京都側集団の関心に共感する者も、実際にはいた。

「掲示板で話題が出たときに、これをinokenで話し合っても楽しいかな、という気はした。いきなりレスをつけようと思っても、考えが浮かんでなくて。向こうが授業でやった面白いものを、うちの授業、サブゼミでやるようにして、その結果をまたWebで返すっていうことにしたら、すごく楽しかったんじゃないかなあ（3年・女・インタビュー）」

しかしながら実行にまで至らなかったのは、先述のとおり、慶應側集団の外集団に対する警戒心が既に醸成されてしまっていたのかもしれないし、比較的早い段階からの「合宿志向」によって、サブゼミの時間を合宿以外のことに充てる余裕がなかったことにもよるであろう。

いずれにしても、KKJ実践における「掲示板」のような電子コミュニティが成立するためには、目標・関心事を共有し、それを基盤として構成員が相互に交流する必要がある（古川、1993）。その意味では、コミュニティが形成されにくい状況が、KKJ実践の初期段階において形成されてしまったと考えられる。

しかし、共有し得るカリキュラムが全くなかったわけではない。6月6日のボディワーク実習（表2参照）は、京都側集団との共通課題であった。そして、学生はこの実習に対する感想を「掲示板」に投稿するように授業担当者に促された。授業担当者の意図は、インタラクションの機会の提供にあったと思われるが、結果的には、ほとんど投稿は行われなかったし、少なくともインタビューの上からは、この意図に気づいている者もいなかったように思われる。むしろ慶應側集団は、ある意味、「ボディワーク」というセッション案が提供されたことで、具体的な合宿のセッションを決めるのに動機づけられていった。

本来、合宿のプロデュースは、共有し得る目標である。にもかかわらず、ここでも「慶應は最初からサブゼミの時

間にKKJのことをずっと考える時間があったけど、京都大学の方は、まあなるようになるよみたいな感じ（1年・男・インタビュー）」を認識しながらも、目標を確認したり、交流を図ったりして、「KKJ掲示板」というコミュニティを積極的に形成しようという動きは見られなかったのである。その結果、「見たか見ないかの確認も取れなくて、掲示板で合宿の内容について話し合いをするのは、うまくいかなかった（3年・女・インタビュー）」。

結局のところ、携帯電話で連絡を取って最低限の合意に達したものの、「携帯電話ってその周りに人がいたとしても、1対1で話してる。なるべくなら、みんなの意見を採り入れて話し合うためには、やっぱり掲示板上でやりたかった（1年・男・インタビュー）」という学生もいた。連絡さえできればいいということではなく、共通の関心を持ち、それについて議論をしあうようなコミュニティが形成されていないことに対して、何らかの不満を感じていたものと思われる。

（4）CMC特有の問題

今回のKKJ実践において特徴的に表れた、外集団とのインタラクションの阻害要因について、現段階で可能な考察を行ってきた。しかし、「掲示板」の上でインタラクションがうまく生じなかったのには、一般にCMCで問題とされているような、心理的な抵抗感によるところも少なからずあろう。例えば、川浦ら（1989）の調査によると、BBSで発言することに対して3分の1強の者が、何らかの抵抗感を有している。そこで、慶應側の学生が、投稿に対していかなる心理的な抵抗感を抱いていたのかを検証するために、インタビューから得られた結果を示しながら、考察を試みることにする。

まず、ほとんどの学生が指摘していたのが、未知の人とコミュニケーションをとることへの不安である。これはいわゆる「匿名性」の問題である。だが、KKJ実践における「掲示板」の場合、実名投稿であり、知らない相手といえども京都大学の学生であることは同定できている。また5月末頃には、集団メンバーの自己紹介シート（1人につきA4版1枚）が配布されているため、ここでいう「匿名性」とは、まだ会ったことがなく、顔や個性が分からない人ということの意味している。

では、このような不安はどこからくるのであろうか。当事者である学生にとっては、よほど内省的にならないと自覚できないような、漠然としたものかも知れない。ただ、インタビューからは、いくつかの側面が捉えられる。1つには、自己開示による印象形成に対する不安である。「私のイメージが勝手に固まってしまう（3年・女・インタビュー）」「向こうがどんな人が読んでるか分からないし、私ってものを知らないで投稿したら、すごいイメージを作られちゃいそうで怖かった（4年・女・インタビュー）」というのである。つまり、「掲示板」上で交わされるコミュニケーションは、コミュニケーション・チャンネルが文字言語だけであり、容易に誤解が生ずるという認識である。あるいは、「何バカなこと書いてんのって言われるのも怖（4年・女・インタビュー）」く、自己防衛が働いている面もあろう。CMCの場合、投稿された内容そのものが投稿者の評価に繋がってしまうからである。そのため、歪曲されたイメージを形成される不安と同様、投稿することによって、自尊心が危機にさらされる可能性がある。

また、2点目としてCMCの非対面性に起因する不安も指摘された。「表情が見えない人に対して、自分が思っていることを伝えて、何かフィードバックが欲しいし、何も発せられなくても、その人の表情とかを見ながら伝えたい（3年・女・インタビュー）」「フリートークみたいなことに関しては、顔が見えないんで、すごいやりづらい（2年・女・インタビュー）」というものである。われわれがこれまで、主たるコミュニケーション手段としてきた対面コミュニケーションに比して、「準言語情報」「外見や表情に関する情報」「視線交錯」「ボディランゲージ」「感情状態を呈する情報」が欠如する（Hiltz & Turoff, 1993）ことによる緊張の高揚が、精神的な不安定感を体験させ、投稿に対する動機づけを弱めることになるのである。

3点目としては、投稿しようという動機はあったにもかかわらず、実際には投稿を抑制させた場合が指摘された。上述の不安に起因して、自身の「表現力」に対する不安である。「うまく言葉にできない（4年・女・インタビュー）」し、「すごく気を遣って書かないといけないので、時間がかかってしまう（4年・女・インタビュー）」、加えて「形に残るっていうことにプレッシャーがある（4年・男・インタビュー）」ため、結局面倒に感じられたり、プレビューの段階で投稿を控えたりといったこともあったようである。

その一方で、「[返信を]つけたいんだからいい、書きたかったから書いたっていう感じ。どういう反応が返ってくるかは、不安に思いながら書きました（1年・男・インタビュー）」という者もいた。彼の場合は、「見たこともあっ

たこともない人と手紙のやり取りやったこともあるし、言葉に気をつけてさえすれば大丈夫だろう」とも言っている。このような態度の違いを生み出す原因は、本論の課題ではない。しかし、個々の持つCMCに対する態度を考慮に入れつつプログラムを構成することも、今後の課題といえよう。

そして4点目には、CMCでは誤解や誹謗中傷などのトラブルを招きやすいという、フレーミング (Siegel, et al., 1986) の問題が挙げられる。

「例えばいいとか悪いとか意見がすごくわかれちゃうような議論をメール上とかWeb上でしたくなかった。そういうところまで話したくなかったっていうのがある。やっぱり言葉で書くのと、実際に対面で話すのとの言葉のきつさとか、そういうニュアンスで言っているわけじゃないとか、そういう微妙なものが伝わらないっていうので喧嘩になったりとかして、すごく怖いなと思ったので。連絡事項くらいにとどめておきたい」(4年・女・インタビュー)

これは、過去のトラブルの経験がCMCに消極的な態度を形成した、典型的な例である。慶應側集団は、入学当初よりメールを使うことを積極的に奨励されており^(vi)、現実にはそれが可能となるような設備も整っている。加えて、グループ・ワーク^(vii)を課す授業も多く、そこでは、メイリング・リストやBBSを使う機会が多い。慶應側集団のそういう背景からすると、程度の差こそあれ、何らかのフレーミングに近い状況を経験している者も少なからずいるものと思われる。遠藤(2000)は、フレーミングが生ずる要因として、①コミュニケーションの不完全性、②自己提示の操作性、③仮想文脈の自己構成性／共同構成性、④蓄積性(記録性)を挙げているが、「ネット上だと人が変わるっていうか、なってしまう人っている。なってしまうのか、そういうふうになっているのか、よく分からないけど(4年・男・インタビュー)」といった経験をしている者もいる。フレーミングに繋がる可能性を認識するかどうかは別にして、少なくとも相手に対する猜疑心を持っていたということからすると、これもCMCに対する消極的な態度を形成する要因となっていたのかも知れない。

(5)「掲示板」という「場」に対する認識

ここまでに社会心理学的なアプローチからCSCLへの参加に対する心理的障壁を見てきた。一方で、当事者である学生にとって、「掲示板」のもつ意義がどのように捉えられていたのかも重要であろう。もちろん、「掲示板」というものの「場」の捉え方は個人によってさまざまであろうが、コミットの深さという観点から、おおむね4つのレベルに集約することができる。

まず、いちばん浅いレベルであるが、掲示板があることは知っていても、「掲示板っていう制度に興味がないから見ない(2年・女・インタビュー)」というように、個人的な感情レベルで反応してしまい、「場」として認識していないレベルである。

第2のレベルは、掲示板の意義を機能的な「場」として捉えていないレベルである。「KKJ合宿をやっているっていうシンボルみたいな意味(4年・女・インタビュー)」でしかない。つまり、参加者としてのアイデンティティを強化するのに役だったということである。

第3のレベルは、掲示板のもつ機能を認識してはいるが、参加者が醸成していく「場」という捉え方はしていないレベルである。「そこに行けば大体その内容は分かる(4年・男・インタビュー)」ので、掲示板は必要だったのである。このような理解では、ROM(Read-Only-Member)的な関わり方にならざるを得ず、「要求がなければ書かない(3年・男・インタビュー)」という課題志向に陥ってしまうようである。

そして第4のレベルは、参加者自身が関わって初めて「場」として機能するという捉え方である。「会話を作らないと、折角の意味がない(3年・女・インタビュー)」のである。このような理解があって初めて、今回のKKJ実践におけるオンライン・ゼミを、参加者自身が振り返ることが可能となるのであろう。そして、このような学生たちが下した評価は、「1人がそれについて答えて、いや自分は違うんだとか、話を膨らませていったりとか、逆にまた元に立ち戻ったりとか、そういうことを自在にできる(1年・男・インタビュー)」し、「意見とか決まり事を共有する場所でありながら、それにみんなが参加できていない。そこがうまくいかなかった(3年・女・インタビュー)」ということである。

第4のレベルで、「掲示板」という場を認識していた学生は、総じて「掲示板」での発言や閲覧を活発に行っていた。京都側集団が発散的に思考を外化し、意見交換をしているのを見て、それに反応して、「まあ別に誰も何も特に別に怒ったりするようなことじゃないし（2年・女・インタビュー）」「まあ、[返信を]つけたいんだからいい、書きたかったから書いた（1年・男・インタビュー）」のである。

このようにしてみると、第1から第3のレベルで「掲示板」という「場」を捉えている学生を刺激し、第4のレベルに到達可能になるように、ある程度誘導するような授業設計の必要性がうかがえる。

5. オンライン・インタラクションを促進するために

このように考えてみると、CMC特有の問題のような従来社会心理学でアプローチされている問題以外に、慶應側集団と京都側集団とのオンライン上での乖離現象という、KKJ実践で特有の問題が生じていることが明らかである。また、KKJ実践の「掲示板」の位置づけは、意見交換や拡散的思考の場としてだけでなく、後に行われる合宿をどのようにプロデュースしていくかについて話さなければならないという、課題志向的な場をも提供するものであった。京都側集団にとっては「掲示板」は思考を発散する場であったが、慶應側集団にとっては合宿という課題遂行のための場として捉えられていたのである。そうした「場」の捉え方の相違によって、これまで述べてきたように、関心が共有されなかったり、慶應側集団の京都側集団に対する警戒心を醸成することにつながったのではないかと考えられる。

そもそも初期段階から集団間がこうした形で乖離してしまっていたため、「掲示板」の中で「合宿用掲示板」とよばれる会議室が開設されるより前には、京都側集団と慶應側集団とのコミュニケーションが成立していなかった。これはインタビューから直接導出されたことではないが、この段階に至るまでの乖離状態では、慶應側集団が京都側集団に対して（あるいは逆も）積極的にコミットしなかったため、外集団に対する情報を入手できなかった、あるいは、しようとしなかった（前節（2）参照）ことが根底にあると考えられる。「結局私たちの行動が限られてしまったのは、京大側はどういう形で集まって、どういう形で授業をしていて、どういう設備があって、っていうのが全く分らなかった（3年・女・インタビュー）」からなのである。

つまり、外集団の状況を把握することなく、内集団のみで意志決定を進めてきた結果、最終的な、集団間のインタラクションが必要不可欠な場面になって、関係の脆弱さ、別な言い方をすれば信頼関係が築かれていなかったことを露呈してしまっているのである。前節（1）や（3）でも触れたことであるが、相手が読んだかどうか分からないという不安、個人の意見がその集団の総意として受け取られてしまうのではないかという不安、あるいは逆に、記事に対して、それが個人の意見なのかその集団としての意見なのかが同定できないという不安、などがそれを示している。

そして、合宿間際になるまで、意思疎通がなされないまま両集団は平行線を辿り、最終的には携帯電話などによるコミュニケーションの補完を必要とするに至ったのである。決して携帯電話などの他メディアの利用を否定するわけではないが、結果的には、「掲示板」上でのインタラクションが十分に活用されたとは言えない状態、即ち、オンライン上でのゼミそのものの失敗が、KKJ実践において生じたといえる。

しかし、これらは回避できない問題ではなさそうである。例えば、「毎週水曜日に全員見られて決めてあった場合。確実にその時点でその日のうちに反応（2年・女・インタビュー）」が得られるなど、そのコミュニティ独自のルールを決めておくというのも有効かも知れない。ただし、どのようなルールを決めるにあたっても、あるいは自然発生的に形成されていくにしても、やはりそこには相互の信頼関係が築かれ、コミュニティとして機能していないことには、砂上の楼閣になりかねない。

そこで、最後に、CSCLを利用した異文化間ゼミナールを円滑に行うためのいくつかの方略を考察し、総括とすることにしたい。

（a）授業における明確なインストラクション

最初に指摘できるのは、両集団の「掲示板」に対するアプローチが全く異なることである。慶應側集団の多くの学生が課題志向のアプローチをとっていたが、京都側集団は必ずしもそれに拘泥することなく、様々な思考の発散を行っていた。

こうした学生の行動の相違の説明は、ゴッフマン(Goffman, 1974)の「フレーム」の概念に求めることができる。

即ち、我々の意味連関、行為連関は、その成立根拠を問わない「フレーム」の中で初めて組織化が可能であるため、我々はその「フレーム」に従って行為をなし、他者の行為への理解を行うことになるということである。大山(1998)はその概念を授業展開に適用した議論を行っている。

井下ゼミでは初期段階で合宿をすることや合宿の企画をすることが授業担当者から強調されていたのにもかかわらず、京大ゼミでは「合宿に対して動き始めるのが、2週間前だった(1年・男・インタビュー)」とされている。つまり、それぞれの授業担当者から提示された「フレーム」が大きく異なっていたのである。これに加えて、そもそも「掲示板」上で何をすべきか、という共通のフレームは、授業概要の投稿以外何も提示されているわけでもなかった。このように、初期段階で提示された「フレーム」の違いやその曖昧さによって、慶應側集団は合宿遂行という課題志向に、京大側集団は比較的アドホックな思考の発散を行うといったように、「掲示板」という「場」の捉え方や「掲示板」上での「行為」の違いが生まれたと考えることができる。

逆にいえば、初期条件として、京大ゼミと井下ゼミにおけるKKJの「フレーム」がある程度共通化されたり、あるいは「掲示板」の利用目的に関する共通の明確なインストラクションがなされることによって、それぞれの学生集団による「場」の捉え方の擦れ違いを回避することは可能となるだろう。

(b) 共通カリキュラムないしは一部カリキュラムの同期化

授業の「フレーム」や授業担当者のインストラクションの共通化をさらに強化すれば、共通のカリキュラムや一部のカリキュラムの同期化につながるだろう。

田口ら(2000)は、「掲示板」における集団インタラクションの促進要因について、仮説として「共通体験」を挙げている。だが、ここでいう共通カリキュラムというのは、共通体験ではない。共通の教育目標を達成するための、より綿密で構造的な教育内容の計画を指す。

今回、大山助教授が井下ゼミで行った「ボディワーク」の実習は、京大ゼミとの「共通体験」であった。だが「ボディワーク」の実習後も、この話題についてとくに京大側と関心を共有しようとする行為は起こらなかった。この理由としては、単に1回だけの共通体験だけでは両集団のオンラインにおける関心の共有を喚起できなかったのかも知れないし、もっと深い問題があるとすれば、既にこの段階である程度集団の乖離状態が定着していたため、共通体験だけでは、その乖離を解消するに至らなかったことが考えられる。

そうすると、1回で完結しない、初期段階からのカリキュラムの共通性を導入することによって、関心の共有や外集団の理解という効果をもたらすことができるのではないかと考えられる。あくまでも推測の域は超えないが、初期段階に共通性があることで、その後両集団が経験するプログラムに相違があったとしても、その相違を巻き込んだ形で共通体験にまで昇華することができるのかも知れない。

ある意味、双方の文化差やアイデンティティの格差があることは、このゼミナールの強みでもあり、逆に弱みでもあると考えたほうが良いだろう。即ち、初期段階で既に不可避免的に、いくつかの相違点を持った状態からスタートしているわけである。さらに、前期だけの授業という時間的制約があることを考えると、2集団間の相違をどのようにして埋め、またどのようにして利用していくかについては、相互の時間軸も大きな要素として考慮すべきであろう。つまり、両集団のオンラインにおける関心の共有のためには、授業全体として何が行われたかということだけではなく、どういう時期に何が行われたか、それは京大と慶應で同じ時期に行われているのか、前後した時期に行われているのか、という視点を持ちつつ、授業を構成していくことが、必然的に重要となるのではないかと考えられる。

(c) 内発的動機づけを高めるための工夫

本論文では、オンライン・インタラクションに対する心理的障壁を様々な角度から検討してきた。慶應側集団から京大側集団への集団評価などによって生じる心理的障壁はもとより、とくにCMCにおける心理的障壁は、ある程度不可避なものであり、簡単に解消できるものではない。

もちろん、こうした心理的障壁を低めるために「掲示板」そのものに改良の余地は認められるが、一方で「掲示板」の機能だけでは解決できない問題も、本論文ではいくつか明示した。

だが、授業担当者からの配慮次第では、こうした障壁を乗り越えて、インタラクションに参加可能な学生も出現す

るのではないかと考える。実際、今回のKKJ実践でも、慶應側集団の全員がインタラクシオンに参加しなかったというわけではなく、ある程度の個人差が見られている。心理的障壁を乗り越えて、「掲示板」上の議論に積極的に参加した学生もいるのである。

このようにして心理的障壁を乗り越え、外集団に対して発言したり、外集団の発言をよく閲覧した学生たちは、「やっぱり京大側が何をやってるのか気になった（3年・男・インタビュー）」と話しており、純粋な外集団への興味が動機づけとなっていることが示唆される。「掲示板」に対しても、「こういう感じで京都の人たちって動いてんだなぁとか、のを確認できたのはメリット（1年・男・インタビュー）」と評価している。

慶應側集団全員が、こうした動機づけを持っていなかったわけではないことを考えると、例えば授業担当者がある種の「フレーム」の提示を行うことが1つの解決策として考えられる。既に、KKJ実践は新しい実験的な合同ゼミナールの試みであることは、両集団の授業担当者は両集団の学生に伝えている。異文化間のインタラクシオンに対しても、オンラインのインタラクシオンに対しても、そうした実験的かつ挑戦的な位置づけを授業担当者が与えることによって、こうした心理的障壁が相対的に低減し、外集団への興味という動機づけが高まる学生が増えていくことだろう。そうすれば、「掲示板」へのアクセスが増加し、「皆が集う『掲示板』」への魅力が高まることによって、CSCLというオンライン・ラーニング・コミュニティの形成過程への参加を促すことができるのではないかと考えられる。

謝辞

本研究は2000年度森泰吉郎記念研究振興基金による助成によって進められた。また、慶應義塾大学総合政策学部の井下理教授、井下ゼミの学生諸氏、京都大学高等教育教授システム開発センターの田中毎実教授をはじめセンターの皆様、北陸先端科学技術大学院大学知識科学研究科の小津秀樹氏と尾澤重知氏には全面的なご協力を頂いた。ここに深く感謝申し上げたい。

引用文献

- Asch, S.E. 1946 Forming impressions of personality. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 41, 258-290.
- Brislin, R.W., Landis, D., & Brandt, M.E. 1983 Conceptualization of intercultural behavior and training. In D.Landis & R.W.Brislin (Eds.) *Handbook of intercultural training*. Vol.1. Pergamon Press.
- Cooley, C.H. 1902 *Human nature and the social order*, New York : Scribner.
- 遠藤薫 2000 電子社会論：電子的想像力のリアリティと社会変容 実教出版.
- 古川良治 1993 電子コミュニティの<虚>と<実> 川上善郎・川浦康至・池田謙一・古川良治 電子ネットワークキングの社会心理：コンピュータ・コミュニケーションへのパスポート 誠信書房、106-137.
- Goffman, E. 1974 *Frame Analysis: An Essay on the Organization of Experience*, New York: Harper and Row.
- Hiltz, S. R. & Turoff, M. 1993 *The network nations* (Revised) MIT Press.
- 稲葉晶子・豊田順一 1999 CSCLの背景と研究動向 教育システム情報学会誌、16(3)、111-120.
- 井下理 1997 異文化理解教育の方法 江淵一公(編) 異文化間教育研究入門 玉川大学出版部、204-220.
- 井下理 2000a 新規教育プログラムの研究開発：企画設計を中心に 京都大学高等教育叢書7 平成11年度KKJーKyoto-Keio Joint Seminarーで何が起きたかー授業・合宿・インターネットを通じた学びー京都大学高等教育教授システム開発センター、12-16.
- 井下理 2000b 2000年春学期のinokenを振り返って 井下研究会春学期論文集 未公刊資料.
- 川浦康至・池田謙一・川上善郎・古川良治 1989 パソコン通信と情報行動：パソコン通信の現状に関する調査研究 II 電気通信政策総合研究所.
- Kiesler, T., Siegel, J. & McGuire, T. 1984 Social psychological aspects of computer-mediated communications. *American Psychologist*, 39, 1123-1134.
- Lewin, K. 1948 *Resolving Social Conflicts*, New York: Harper and Row.

- 益川弘如 1999 相互リンク作成による学習内容の再吟味支援とその効果 第2回認知科学国際会議・日本認知科学会第16回大会合同会議発表論文集、653-656.
- 三宅なほみ 1997 インターネットの子供たち 岩波書店.
- 大山泰宏 1998 授業のフレームと日常の知ー「何でも帳」を主とした相互行為分析を通してー 京都大学高等教育研究 第4号 65-81.
- 尾澤重知 2000a CSCLとしてのKKJ掲示板の概要と慶應義塾大学から見た掲示板利用の実際 京都大学高等教育叢書7 平成11年度KKJ-Kyoto-Keio Joint Seminarーで何が起こったかー授業・合宿・インターネットを通じた学びー京都大学高等教育教授システム開発センター、124-145.
- 尾澤重知 2000b 学習者の相互作用を促進するCSCL学習環境の構築と課題 京都大学高等教育研究 第6号 135-147.
- 尾澤重知・小津秀樹・望月俊男・國藤進 2000 協調学習におけるグループ間インタラクションを支援するCSCLの開発 教育工学関連学協会連合第6回全国大会講演論文集、667-668.
- Siegel, J., Dubrovsky, V., Kiesler, S., McGuire, T. W. 1986 Group processes in computer-mediated communication. *Organizational Behavior and Human Decision Processes*, 37, 157-187.
- Spears, R., Lea, M. & Lee, S. 1990 De-individualization and group polarization in computer-mediated communication. *British Journal of Social Psychology*, 29, 121-134.
- Sumner, W. G. 1906 *Folkways*. New York : Ginn.
- 田口真奈・村上正行 1999 KKJ実践におけるインターネットの位置づけーインターネットを用いた高等教育実践研究の動向をふまえてー 京都大学高等教育研究 第5号 41-55.
- 田口真奈・村上正行・尾澤重知・神藤貴昭 2000 KKJ実践におけるインターネットの役割 教育工学関連学協会連合第6回全国大会講演論文集、55-56.
- 田中每実 2000 KKJ (京都大学慶應義塾大学連携ゼミ) 実践の前提と展開 京都大学高等教育叢書7 平成11年度KKJ-Kyoto-Keio Joint Seminarーで何が起こったかー授業・合宿・インターネットを通じた学びー京都大学高等教育教授システム開発センター、1-11.

注

- (i) 2000年度のKKJ実践で利用されたインターネット上のツール(CSCL)は通称「KKJ掲示板」や「掲示板」と呼ばれていた。一般にBBSのことを「電子掲示板」と呼ばれることがあるが、本論文では「掲示板」は、KKJ実践におけるツールの呼称として表す。
- (ii) 1名は病気入院によりKKJ合宿に参加できなかったため、対象外とした。
- (iii) 京大ゼミ及び井下ゼミの学生は、毎週の授業の内容の概略を「掲示板」に投稿することを授業担当者から要請されていた。
- (iv) 井下ゼミの愛称として、授業担当者をはじめ、学生全員がよく使う。先生と学生が全員参加するメイリング・リストの名前もinokenとなっている。
- (v) 当日は金曜日であり、大学の正課授業は実施されていた。このため数名の学生が授業を欠席しなければならなかったため、全員が自由な集合時間だという結論が出された。しかしながら、京都側集団も条件は全く同一であり、そればかりか京都から合宿地(修善寺)までの距離は、藤沢から合宿地までに比べてはるかに遠い。
- (vi) 慶應義塾大学湘南藤沢キャンパスでは、入学後すぐに電子メール、WWWなどの利用が可能なキャンパスネットワークシステム(CNS)のアカウントが全学生に発行される。また、入学後第1学期では情報処理の授業が必修となっており、学生は授業でそれらの基礎的な使い方を学ぶ。
- (vii) 慶應義塾大学湘南藤沢キャンパスでは、複数人である課題を協調して遂行する形態の課題を課す授業がいくつか開講されている。この学習形態は「グループ・ワーク」と呼ばれている。